

## 小林賢太（令和四年三月号）

ケンタツキー食めば輝く唇の赤はこの世に意志ある証

食べ終へし骨のしろたへはつはつと光りてかすか蛍のごとし

片隅のダストボックスその中の骨は夢見るジュラ紀の記憶

靴裏を見れば踵はすり減りてわたくしだけの静かな傾りカタ

生まれてはまた薄れゆく夜の闇ひらがな綴るやうな朝風



### ●作者の言葉

「和歌の研究を志すなら  
作すべし」と指導教授に助言  
されてから数年後、心の花の  
仲間に入れていただいたのは

二〇一八年春でした。とはい  
え、生来怠け者の私は月詠も  
サボりがち。「このままでは  
いけない!」と思い、月詠皆  
勤を抱負に掲げたのは二一年

元旦です。その年は毎月欠かさず歌を送ることができました。今回佐佐木朋子先生より年間選者賞をいただいた連作は、その年末に送った歌です。皆勤のご褒美のようでも嬉しく、さらなる励みとなりました。本当にありがとうございます。

### ●選者の言葉

毎月、わたしの担当として渡される会員の方達の歌を、五首を一つのまとまりとして選び、その後、表現やテーマでまとまったものを選んでゆくことにしている。

大抵一〇作品くらいが特選の候補に残る。大きな制度改革や時勢が動いて個人の内面に変化をもたらすようなときなどは似たようなテーマが並ぶことにもなる。

特にこの何年かはそうだった。

そんな中で、小林さんの作品は大きくは社会、またアイデンティティとしての職業などにあまり絡まない。心象が表現そのものと一体化している。

ジュラ紀の遺物も比喩に留まらないで、想像を広げる布石のように扱われている。さまざまな布石を試されたことと思う。